

現地コミュニティでの障害者の権利概念導入について： イスラエルの事例

ツヴィカ・オール (Ph.D)
エルサレム工科大学

日本-イスラエル『障害と開発』国際セミナー
2022年12月15日 (木)

はじめに

人権についての国際的な規範は、既存の現地の価値観、規範、信条、考え方や慣行といったことと相互に影響し合う。

障害者(PWD)人権についての世界的な考え方がイスラエルの地元の保守的なコミュニティでどのように現地化され、導入されてきたのかを検証。

現地化

「海外の考え方を現地のアクターたちが意欲的に構築していることで、現地の信条や慣行と海外の考え方が相当程度一致してくる結果をもたらすこと」
(Acharya, 2004: 245).

ヴァーナキュライゼーション

現地語化

「国際機関が持つ世界的な領域からの考え方や慣行を引き出すこと、またそれらを地場の文脈内の価値観や物事のやり方と共鳴する考え方や慣行に翻訳すること」 (Merry & Levitt, 2017: 213).

従来の研究で見逃されていたこと

- 現地化についての研究では、規範の拡散の認識論的また解釈学的側面が無視されることが多かった (Chan-Tiberghien, 2004; Jijon, 2019)。
- 現地化についての既存の論文も障害者の人権については通常、焦点を当ててこなかった。
- 障害と宗教についての研究は、十分に発達していない (Imhoff, 2017)。
- これまでの研究では、ユダヤ教超正統派社会における人権の問題に触れてこなかった。

リサーチクエスチョン

- 障害者の人権が地元の社会で、どのように見られ、概念化され、また解釈されてきたか。
- こうした諸権利についての知識はどのように社会的に構築され、拡散してきたか。
- 世界的な人権のディスコースは、地元の現地の領域にやってきた時、どのように現地化されたのか、またもし現地化されたのだとしたら、この過程に関わったのはこういった社会的アクターなのか、そしてどのようにその過程は起き、こういった結果になったのか。
- この過程でさまざまな世界に関わる領域と国内の領域との間の仲介者たる関係者の果たした役割はどのようなものであったのか。
- これらのアクターの抱えたジレンマや課題はどのようなものであったのか。

イスラエルのユダヤ教超正統派社会

- 超正統派のユダヤ人はイスラエルの総人口の13% (Cahaner & Malach, 2021).
- 彼らはユダヤ教の教義(ハラーハー)に厳格に従う教徒で、ラビたちが生活の全側面について社会に命令を下す。
- 社会的な諸境界を維持している境界が目立つ社会
- 殆どの超正統派の人たちは、都市に住んでいるものの、非宗教的な社会とは分離された界限に住む方を望んでいる。

- 他の教育システムとは分離された教育システム
- 構成員の行動について広範な社会的支配が行き渡っている
- 家族中心の生活様式
- 保守主義
- 男女の隔離
- 食べ物についての特別な決まり
- 厳格な服装規定

- 約半数の人たちは貧困状態で生活
- 近年、一般的なイスラエル経済、社会、市民活動面に超正統派が参加することが増加

(Braun-Lewensohn & Kalagy, 2019; Genut et al., 2022; Golan & Fehl, 2020; Orr et al., 2021; Regev & Gordon, 2019; Vardi et al., 2019)

研究方法

- 超正統派の障害者の権利を促進し、彼らに対するサービスを提供している関係者に対する28回の詳細な半構造化インタビュー
- 対象者は、障害者の権利について説明をしてきた人たち
- 対象者の殆どは超正統派の人たち
- 対象者の中には障害を自ら持つ人たちもいたし、中には障害児の親もいた
- イスラエルにおける超正統派社会についてのより大きな研究の一部として実施
- インタビューは録音され、全て文字化され、質的内容分析やグラウンデッド・セオリーを用いて分析された

得られた成果

1. ユダヤ教の教義 (ハラーハー)

- ハラーハーは障害者の諸問題についての限られた寄りどころだが、そこで障害者は社会の中の明確な社会的カテゴリーとして論じられているわけではない
- ハラーハーの問いかけは、結婚や家族形成のような障害者の周辺での問題を提起している
- 回答した人たちの中には、ユダヤ教の伝統では義務、責務や責任といったものが諸権利よりも強調されると主張する人たちもいた
- しかし、回答した人たちの多くは、ユダヤ教は人権という考え方と一致した考え方だと強く主張していた

2. スティグマ

- 回答した人たちの多くが、障害者に向けられるスティグマは、超正統派社会では次の三つの理由でもって他よりも大きいと主張した
 - A. 仲人を通じた結婚
 - B. 厳格な社会規範を守る社会。ある種の障害は、社会的異常とみなされている
 - C. 障害を含む個人に起きたあらゆることについて、それは、その人だから起きたのだとする見方
- 近年では、スティグマ化を減じようとする諸団体の活動の結果、障害について肯定的に見る変化が見られる

3. 隠蔽と沈黙

- 見えない障害は隠蔽されることがしばしばある
- 障害を人目にさらすかどうか、またいつさらすかについて、ディレンマを抱えている人が多い
- 障害は、「公然たる秘密」
- この領域では、ポジティブな変化が起きている

4. 慈善的努力と愛情に満ちた親切行為

- 超正統派で広く見られるディスコースでは、慈善的、また善意からの愛情に満ちた親切行為が強調されている (ヘブライ語で "chesed (ヘセド) "と呼ばれる).
- こうした行為は人権概念からすると奇妙なものである (階層権力的で、庇護者主義的)。
- これらは、世界的な、また現地での諸概念が一体となった混成的なディスコースをも構成しているかもしれない

5. 人権のディスコース

- 多くの回答者たちによれば、ユダヤ教には諸権利の言い回しがあふれているが、国際的文脈での人権のディスコースは、超正統派の諸社会では一般的ではないという
- 超正統派の考え方と人権の自由主義的な諸概念とは相容れないことが多い
- 国際的な人権のディスコースでは変化を促す志向性があるが、超正統派の文化では、社会の連続性や保守主義を褒めそや
- 女性やLGBTQ個人の平等権のような重要な人権問題は、超正統派の社会的規範では否定されている

- 調査対象者たちは、変化の始まりと要求可能な諸権利を有する人々としての障害者という強化されてきている概念とそれらが何であるのか理解してきた
- 調査参加者たちは、社会の中の変化主体として、超正統派のディスコースも見据えながら人権のディスコースを用いている超正統派の障害者と共に活動してきた超正統派の非政府機関を見てきている
- これらの人たちは、超正統派の社会にとっては外部となる当事者たちと共に活動してきた人たちであり、超正統派社会の内部での諸権利のディスコースを組み込み始めた人たちである

5.1. 諸人権のタイプ

2種類のタイプの人権の間の区別:

- 国家によって与えられた諸人権
- 自分の社会の内部で有している諸人権

5.2. 活動家たちの自己認識

自分たちのことを「人権活動家」だとは思っていない

5.3. 「人権」 vs. 「権利の実現」

よくある区別:

- 占領地域のパレスチナ人の人権に関連した「人権」という言葉は、あまり受け入れられていない
- 「権利の実現」という、イスラエル市民のより正当な経済的・社会的諸権利と関連している言葉は、これよりも受け入れられるようになっている

5.4. 知識の流布

- 宗教的な理由でもって、超正統派の人たちの多くは、インターネットにアクセスしておらず、諸権利についてのオンライン情報に触れていない
- 情報の多くは、人口に膾炙する形で広まる。このために不正確さの問題が生じるが、広まる効率は良い

5.5. 営利目的の中間商人への依存

諸人権の認識では商業的中間商人が中心となっているが、それは次のような理由による:

- 諸人権についての知識の不足
- 政府諸機関不信と離反感情

6. 人権の現地化

- 超正統派の活動家たちは、感覚上の、また社会面での変化に関係した超正統派社会内での障害人権のディスコースを推し進めようとしている
- この目的を達成するため、彼らは世界的な道徳世界と現地の道徳世界をひとつにまとめるような現地語化された人権概念を用いている

6.1. ユダヤ教の資源を利用する

- 現地化の過程では、これら活動家たちは、現地の超正統派の知識、考え方、概念、信条といったものを動員する
- たとえば、彼らは愛に満ちた親切や事前といった考え方を利用するが、そこに障害の社会モデルや諸人権の考え方といった意味を徐々にそこに組み込む

6.2. 具体化、詳述、単純化

- 調査回答者の中には、禁止されている「人権」という言葉をより受容される概念である「諸権利の実現」という考え方に言い換えようとしている人たちもいる
- 提案されている具体的で特定の意味を持つ諸活動やその元になる論理を、「人権」という言葉を使わずに明確なものにする

6.3. 人権という考え方に対する抵抗との対峙

調査回答者の中には、超正統派の対話相手の中での「人権」という言葉が火花を散らすような抵抗に直接的な形で、また明からさまに直面している人たちもいる

6.4.階層権力的で社会的な階層化を維持する一方で、人権を促進する

アクターの中には、超正統派の社会規範から逸脱することなく、文化的に適切な言語を用いることで、障害権利の促進を確かなものに行っている人たちもいる

6.5. 慈善と憐れみという考え方に立ち向かう

調査回答者たちは、慈善と憐れみという考え方に次の二つの正反対の仕方で立ち向かった:

- 諸人権とは反対のものだとしてこの考え方に正面から立ち向かう
- この考え方を、諸権利を勧めるための自分たちの活動の動機付けとして受け入れる

6.6. ラビたちと共に活動する

- 調査回答者たちは、ラビたちと一緒に活動したり、諸権利のことが分かっている中間商人とすら一緒に活動する
- 例えば、彼らは自分たちの依頼人が困難に直面している時には、ラビ委員会と共に活動する。このラビが依頼人と話をするわけである。
- 調査回答者たちは、シナゴークの管理者たちに、障害者の諸権利について、この人たちがシナゴークのコミュニティの人たちに情報を提供してくれるという望みを抱いて、教える

6.7. お役所の理屈を依頼人たちに説明する

- 調査対象者たちによれば、超正統派の人たちは、政府による諸権利の割り当て基準について理解していなかったり、それを受け入れられなかったりすることがよくあるという
- 依頼人たちへの支援の提供の一部として、調査対象者たちは、自分たちの依頼人に対し、政府当局が決定を下す基準についての原理について「解説」しようとしている
- 調査対象者たちは、お役所の理屈を (Handelman, 2004) 依頼人たちに明らかにする

6.8. 当局の見方を変える

- 説明はこれとは異なる方向で行われることもある: コミュニティから当局へのメッセージを説明するという仕方である
- アクターたちは、自分たちに共通する道徳や社会的論理に基づいてお役所の理屈に対抗するように依頼人たちと一緒に戦うこともある
- 調査回答者たちは、政府当局を彼らが超正統派の社会の中の障害者の扱いにおいて、超正統派の文化を考慮にいれていないとして批判もした。彼らは当局の見方を変えようとしている。

7. 活動家たちの挑戦と説明者あるいは現地化主体としてのジレンマ

7.1. 超正統派社会内部の規範とは異なってくるという感覚

- 活動家の中には、人権領域での世界観と、超正統派社会での世界観の間のギャップが常にある中で生きている
- 結果として、中には超正統派のコミュニティ内部での違和感や疎外感を表明する人もいる

7.2. 自分の個人的な立ち位置とラビとしての立ち位置の間での緊張

調査対象者たちは、障害に関わる諸問題ンおあるものについて、自分の個人的な見方とラビのあるものの立ち位置との間にギャップがあることを述べていた

7.3. 超正統派の社会的規範の遵守か、国家制度に従うか

超正統派のNGOで国からの資金でもってサービスを提供しているところの職員は、二つの忠誠心、つまり、超正統派コミュニティの規範と国の規範の二つの義務から生じる難しさについて述べている

結論

- 規範や考え方について、世界的なものと地元のものとの間の複雑な混成を指摘したが、その中では、輸入された概念と地場の概念とが一緒になっている

ヴァーナキュライゼーション

- 現地の言葉に直すことについての論文の多くは、諸権利の説明を説明をする人の側での現実問題のひとつとして見てきており、彼らが国際的な規範が地元で受け入れられるようにするために行った妥協だと見ている (Kenyon, 2019; Merry et al., 2010).
- これとは対照的に、説明をする人たちは、宗教的な地場の価値観に深いところで従っている。彼らにとっての現地化とは、制約ではないが、二つの世界の間の本質的な結びつきを反映したものである

ありがとう
ございました！

orr@g.jct.ac.il

www.jct.ac.il/en/community

HUMAN RIGHTS QUARTERLY

Localization of Human Rights of People with Disabilities: The Case of Jewish Ultra-Orthodox People in Israel

Zvika Orr, Shifra Unger, & Adi Finkelstein

<https://www.jct.ac.il/media/5863/human-rights-quarterly.pdf>

JOURNAL OF HUMAN RIGHTS
<https://doi.org/10.1080/14754835.2020.1868294>

 **Routledge**
Taylor & Francis Group

 Check for updates

The challenges and dilemmas of local translators of human rights: The case of disability rights among Jewish ultra-Orthodox communities

Zvika Orr, Shifra Unger, and Adi Finkelstein

Jerusalem College of Technology

<https://www.jct.ac.il/media/5865/journal-of-human-rights.pdf>